

ヨーロッパ リゾート スポット 探訪記

WORLD
RESORT
STYLE

ヨーロッパのホリデースタイルとリゾートライフ
その建築から料理までの表裏を探訪する

VOL. 11

今月の探訪地

Athens

Athens (ギリシャ)

[illegible]

写真・文／森藤正洋(フォトグラファー) 取材／辻 暁玉
現地コーディネーター／ヴェリス千賀子

ヨーロッパの朗らかさを持った100年続く醸造所 & バー

1 Brettos

DATA

所在地: Kydathinaion 41 Street Athens, Greece
URL: <https://www.facebook.com/brettos.plaka>



1 00年続く、醸造所もバーであり、アテネ有数の観光地にもなっているのが「Brettos(ブレツトス)」だ。その歴史もさることながら、天井まで伸びる棚一列に並べられた40種類を超える自家製リキュールボットのディスプレイには、外の暑気から目を奪われる。

自社の醸造所でつくられているギリシャの地酒「ウーロ」やブランドの棚が並べられた棚は、まったく涼しくない大人な無邪気さを感じさせる。この「大人可なり」日本のディスプレイではあまり見られないヨーロッパ的な明るさが見え隠れする。

撮影をしていて、壁が微妙に歪んでいてカメラの垂直を決めるのにかなり悩んだ。建物のゆがみもあるのだろうし、当時手に入った木材でつくったのが、日で見ても歪みが分かるほどだった。その年季の入った狂いが、絶妙な異心地の良さをつくっている。高いスツールも、非常に堅牢で、座面のところどころ、擦れるほど使い込まれている。古代ギリシャから彫刻でも多用されていた大理石が、ここではテーブルとして長く使われて、ツヤのないザラツとした感触になる。

218 SHOTENKENCHIKU Nov. 2018

セレブリティ御用達、絶景ホテル

3 Le Sirenuse Hotel e La Sponda

DATA

所在地: Via C. Colombo, 30, Positano, Italy
URL: <http://sinenuse.it>



テラスからボジダーノの風景を楽しめ、世界のセレブリティが泊まる宿「Le Sirenuse Hotel(ル・シレーヌ・ホテル)」。サービスは、宿泊客に対して過剰な低姿勢ではない。しかし、スタッフには客への敬意があり、プロフェッショナルな堂々とした仕事ぶりから安心感が伝わる。それが客として、ふさわしい場所にいるという満足感を与えてくれる。

ホテルの外壁はボンベイをイメージさせる赤だが、これみよがしな高価な外壁ではない。庶民的な意味での豪華があるわけではなく、目立たなく静かで、品を感じさせる。部屋を見ると、まったくくわのしないシーツや、傷一つないグラスなどに丁寧な仕事が見える。磨かれた手書きタイトルの床など、部屋の隅まで気遣いが及んでいた。

普段から多様な生活を楽しむゲストが求めているのは、自宅のそばにリラックスできる心地のよい家。それでいて必要な時に完璧なサポートを提供し、それ以外に任せておいてくれる。この絶妙な空気感に、ホテルが客を理解しているのだから。長い滞在になさるべく、常にホスピタリティの満足感に届く滞在ではなかった。

田中が思いつけなかった美しい造形があるレストラン「La Sponda」(ラ・スポンダ)。「食材の品質は非常に高く、内閣が取りたい魚の種類は、味が落ちないよう生を詰めた納品され、誰がラースもブランドのタグが付いた丁寧に処理されたものだった。



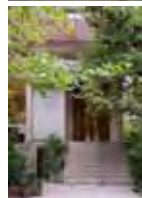
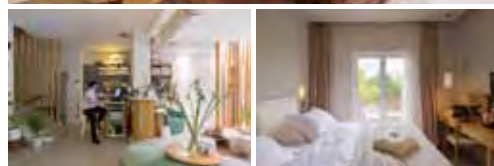
222 SHOTENKENCHIKU Mar. 2018

ベッドブランドの製品を体験するコンセプトホテル

2 COCO-MAT Hotel Nafsika

DATA

所在地: Pellis 5, Kifisia Greece
URL: <https://nafsiika.coco-mat-hotels.com/>



C OOO MAT Hotel Nafsika [ココマット・ホテル・ナフシカ] があるアネックス外野のオフィシアは、日本だけでなく東京の自由が丘のようなところであり、低層の高級住宅地だ。商業エリアには質の高い飲食店が並び、若い世代に人気の場所になっている。

これはオーストラリアで、アメリカには数々の店舗があるベットのブランドで、同ホテルはメーカーの名前を冠した住居型のコンセプトホテル。自社ブランドのベッドや家具で構成されている。天然素材を使用した家具はナチュラルで丈夫。全体的にゆるやかなカラーパレットは色使いは、エッジに富むデザインのカラが感じられた。

ホテルの客室は、友人宅の客間というような印象で、メゾネットスイートになれば、良質な家具で構成された、インテリア雑誌の部屋のような洒落た居心地の良い空間になっていた。

1階はレセプションと自社ブランドのショップ、朝・昼・晩の食事をおこなうダイニングレストランが

一体化している。ここにあるテーブルやイス、ソファも自社のものだ。一泊という時間を使って、食事を含めた居住空間全てを提案するというのは、ブランドにとっても宿泊客にとっても有意義なプレゼンテーションになると感じられた。

Nov. 2018 SHOTENKENCHIKU 219

最高級ホテルのノウハウを持った修道院ホテル

4 Hotel Parsifal Antico Convento del 1288

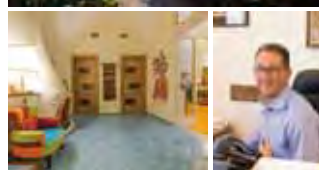
ラ ヴェッロは、アマルフィーからバスで20分程険しい道を登った山の頂上にある。絶壁く切り立った美しい山は、中世キリスト教の修行の地であり、多くの教会が建てられていた。[Hicet Parasitæ (タル・パルシファウ)]は山頂の北斜面に1288年につくられた修道院跡を修繕し、ホテルとして再開されたもので、中世の気配を見事に再現した建物は、イタリアの建物の傑作の高さを感じられる。

そして、このホテルの構成要素として、ティレニア海の絶景が挙げられる。イタリアは、風景に限らず都市であっても、惜しまれ入られたデザインが数多い。

三代目となるホテルのオーナー、アントニオは世界の有名なホテルと働き、最後はヴェネツィアの歴史的建造物でもあるホテル「ダニエル」のマネージャーを経て故郷に戻った。そうした世界のセレクトブリーチが落着いた最高級ホテルのノウハウを持ちながら、彼のホテルは高層を本向してはいない。故郷ラヴェンナを、1年を通して人々の最高の観光地に盛り上げたいという思いから、地域のプロジェクトとしてコンサートやワーグナー音楽祭を開催、音楽の都として多くの人々が訪れるようになった。故郷への強い愛情にイタリアのDNAを感じた。

DATA

所在地: Viale Gioacchino d'Anna 5, Ravello, Italy
URL: <http://www.hotelparsifal.it>



Mar. 2018 SHOTENKENCHIKU 223

{ VERNACULAR } { SHOP DESIGN }

世界の街を訪ねて

vol.25 イスタンブール／トルコ

写真・文／斎藤正洋（フォトグラファー）



MIKLA

トルコ・アナトリア地方のキューイズ・レストラン、「ミクラ」。料理の評価も高いが、ロケーションが素晴らしい。ミクラは高層ビルの最上階フロアのレストラン、ルーフトップバーで構成されており、オリジナルカクテルも見事な味わいだった。ガラス張りのナタス邸からはボスフォラス海峡やアジアサイド、金角湾、旧市街と、イスタンブールのほぼ全てが眺められる。抜ける良い空の下に吹き抜ける風心地良く、イスタンブールにいることの臨場感を与えてくれる。



トルコはヨーロッパとアジアにまたがり、各地方で多様な文化を持っている。イスタンブールはその要として、両大陸の文化を融合しながら現代に至っている。だが普段、日本に入ってくるトルコの情報は、国際情勢と観光地としての歴史遺産の話がほとんどではないだろうか。

イスタンブールの商業施設は、特徴的な気候と、街のはとんどを占める古い建築物の影響を非常に大きく受けている。夏の東京の湿度は65~80%なのに対してイスタンブールは20~35%で、風が流れれば、オープンテラスは室内より快適である。また、新市街ですら550年の歴史を持ち、イタリア以来からアフリカ沿岸までを手中にしていたオスマントルコ帝国の栄華の残る建築物を、安全性のためであっても安易に建て替えることはないだろう。

そうした状況の中で古代と現代の要素が混ざり合い、変貌を繰り返しながら機能しているのが興味深い。それこそがイスタンブールの魅力だと思った。

VERNACULAR SHOP DESIGN

**TAXIM HILL HOTEL**

ヨーロッパサイドの地区の高山に位置するタクシム広場に
面して建つ「タクシム・ヒル・ホテル」。抑えた色味ながら、
装飾的なインテリアとシャンデリアが目を引く。エントラ
ンスの床には、トルコの魔除け「ナザールボンジュ」をモチ
ーフにしたパターンが描かれていた。魔女のようなデ
ザインのレパトリアンロービーを含め、古い建築物のため天
高は低いが、この開閉域がけは、暑気や風を離し、涼しいた。



{ VERNACULAR } { SHOP DESIGN }

世界の街を訪ねて

vol.11 メンドーサ／アルゼンチン

写真・文／斎藤正洋（フォトグラファー）

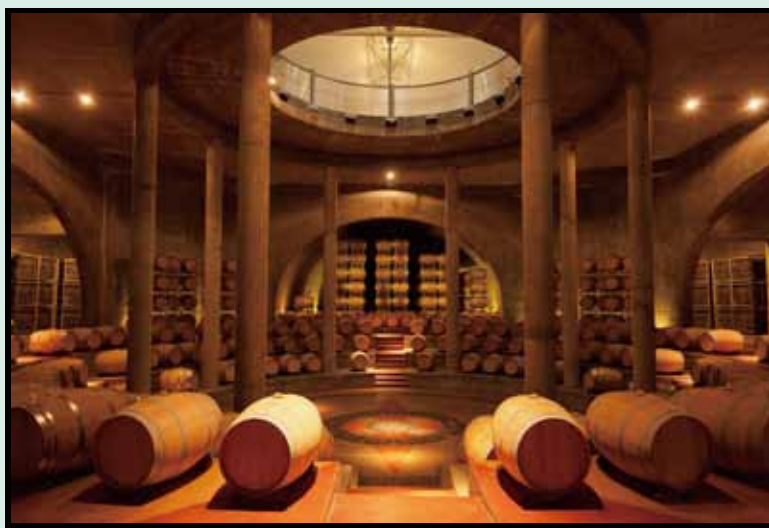
BODEGAS
SALENTEIN

見える土地すべてがワイナリー「サンティン」のブドウ畑であった。その巨大な土地の真ん中にある場所に見えるのが、地下貯蔵庫へ続く建物。向かい合った場所には教会があった。入口と出口の2つの場所と交差している構造は、組織的な温度管理がされており、醸造過程の中で発生する自然熱を循環させる構造になっている。地下貯蔵庫の広場のような空間では、コンサートも開かれる。アルゼンチンではワイナリーはお祭りの会場のであり、結婚式でもある。その広域から四方の地方に広がる入り口の先には貯蔵庫が更に続く。これは地下都市のレベルであり、日本では認識されていない。なかなか南米という実相には見えない。



アルゼンチンにおいて牧場や農園のオーナーになるということは、日本ではたとえばIT企業の創業主になることと同様な役割を持った仕事である。日本の会社経営者には有能な企業主づくりを目指し忙し働か、人材によって価値を生み出すが、アルゼンチンの農園のオーナーは土と共にゆったりと暮らし、土から恵みを生み出すのが良しとされる。このワイン農園をリゾートという可能性で捉えたのがワイナリー・システム。ワイン農園内のブドウ畑や蔵、醸造所なども含めてワインを飲んでもいい、滞在型の提案である。アルゼンチン政府も後押しするエコツーリズムであり、今後更なる発展が見込まれる。

VERNACULAR SHOP DESIGN



{ VERNACULAR SHOP DESIGN }

世界の街を訪ねて

vol.13 ブエノスアイレス②／アルゼンチン

写真・文／斎藤正洋（フォトグラフィアー）

ローマが古代と中世を伝える都市であるなら、ブエノスアイレスは中世と近代の境目にたつた。多くの建物は築200年近くに及び、そこに存在する美しさもまた100年を越えてきているものである。もし人間が建築に競争しているとするれば、新しい建物はより美しく、素晴らしいものになるはずだが、そうならないのは先意識の遠いではないだろうか。地中海やヨーロッパの美意識は、過去を積み重ねて表現するもの。新大陸のそれは過去を切り離して未来を目指すものであることが多いが、南米大陸の国々はその例外で、圧倒的に過去を積み重ねている場合が多い。

アルゼンチンは栄華を極めた時代を経て、現在まで低迷が続く。だが、この都市は衰微であり続ける。その「衰微」とは予算を削げるということではなく、最大限に想像力を膨らませることとブエノスアイレスは教えてくれる。

VERNACULAR SHOP DESIGN

EL ATENEO

古くより劇場になりかけたオペラハウスが、書店として再生された「エル・アテネオ」。雑誌や新聞社が「世界で最も美しい書店」と讃げ、美しい空間を持つ書店を演出することがあるが、そこでも夜を演出されている。空間は時間と手を動かした分だけ美しくなり、アイデアも想像力を見みまわすに魅力的になる。ここで価値を持ったことだった。ステージがカフェになっており、観客席だった書庫の売り場が見える。真ん中の最前列に陣取れば、かつてこの場で芝居がたつた人々の顔ぶれが目の前に現れることが出来る。客席は全てゆとりを持った書庫で埋め尽くされていて、中央に吹き抜けを設けた大空間。もし同じ住居で書店を新たに作る場合、一休王様のプレゼンテーションを再現する必要があるだろう。ここで出会う体験は、単に本を購入するだけではない。



216 SHOTENKENCHIRU Oct. 2015

Oct. 2015 SHOTENKENCHIRU 217

{ VERNACULAR SHOP DESIGN }

世界の街を訪ねて

vol.24 ボスジャ島／トルコ

写真・文／斎藤正洋（フォトグラフィアー）

トルコの海はボスボス海峡を境に、北は黒海へつながり、南はマルマラ海を経てエゲル海、地中海へつながる。ボスジャ島はエゲル海に面し、中世ベネチア共和国の要塞が残る。トロイの遺跡にも程近く、古代より交通の要所だった。この島の石壁の街には、極彩色の花が咲き誇り、観光エリアとしての空間を華やかに演出している。豪華なカーペットとイスが置かれたレストランであっても、カラフルな色彩感覚と想像力によって、魅力的なリゾートを生み出せることを実感した。

SIMYON bance

中央の壁による高さ感が印象的という目を引いたレストラン「SIMYON」。同色でまとめたわたしのバタンスの真鍮に、天幕のない中風が美しく感じられ、エゲル海の古代要塞のイメージになる。



「SIMYON」はおもちゃ箱がイメージされるようなカラフルなレストラン。装飾的の印象という、店先には、子供用のようなサイズの10人掛けのテーブルがあった。観光客がビーチやワイナリー巡りで訪れているが、夜は家族や友人の集まりと通ずる様に、華やかな空間が感じられた。



VERNACULAR SHOP DESIGN



ボスジャ島には小さなホテルが多く、宿泊用のダイニングレストランが併設されていることは少ない。観光客は地元のレストランへ寄り添い、おののけに入った店ですべてを味わう。長時間にわたる滞在は、訪れてくれるゲストが「島」という気分を魅力的に演出していた。毎夜、暖かい空気の下の新鮮なシーフードがテーブルに並ぶ。



itirli bance

「itirli bance」はギャラリーカフェ。周囲にグラフィックが貼られた入り口にはメニューボードもなく、個人住宅の中庭的なお洒落さが、友人宅を招くような心地良さを演出していた。中へ進むと、簡単な設備だが、エスプレッソからトルココーヒーまでがメニューに盛り込まれた。木の温のシェードと暖かい島の気候が光のインテリアをつくる。ふと、あえて手を入れないデザインもあることに気がつく。



216 SHOTENKENCHIRU Sep. 2016

Sep. 2016 SHOTENKENCHIRU 217